

環境首都エッカーンフェルド ドイツ

2000年視察

ハンブルグから北に車で一時間半、バルト海と黒海を結ぶ運河を越えると静かで美しい田園風景が始まる。その先にドイツの環境首都に選ばれた町エッカーンフェルデがある。

ドイツ環境自然保護協会（BUND）が隔年で選出している環境首都に94年と95年に選ばれた街である。

環境首都といえばフライブルグがよく知られているが、フライブルグは人口20万人の中都市、このエッカーンフェルドは人口2.3万人の小さな街である。大きな街だからエコが推進できるわけではなく、大きいからこそエコは進めにくいともいえるし、その逆に小さければ日本の街のように過疎が進んで元気を失ない、エコに意欲を出すどころではないといった状況だっている。

エッカーンフェルドのエコ活動は小さな市議会の思い切った開発計画の見直しと、一人の開発担当官のお金をかけない小さな知恵によって生まれた。

元々環境意識の高かったこの街は18年前からメイン道路1.3 kmを車乗り入れ禁止にしている。その代わりに自転車専用道路をつくっており、自転車を利用する姿が目立つ。さて、この街でもドイツ全域で自然環境保護が叫ばれるようになった80年代に入ってから市全域の土地利用計画を見直す動きが始まった。

そこで調査に当たったミヒャエル・パクシーヌ氏は、それまでの計画が住宅や産業開発地が未利用地の多い北側に集中しているが、そこには自然のビオトープ（生物生息空間）が多くあることを指摘し、住宅・産業開発地を北側ではなく南側にもっていき、ビオトープを復活されることを市議会に提案した。

既に始まっている開発方向を逆転させるこの提案に対して市議会の猛反発が予想されるどころだが、議会はこれを承認し、土地利用の大転換が始まった。

しかし、既に北側の土地ではビオトープの沼は排水されて枯れていたり、小川は蓋をされていた。こうした状況を再生するには大変な資金が必要とされたが、パクシーヌ氏は沼の水を排水している管をたった5.8DM（約350円）のバケツでふさぎ、それからは水が自然に沼に溜まりだし、ビオトープが見事に復活した。このためこの池はバケツ池と銘々され、小さな知恵が大きな資金を節約し、そして貴重な環境を残すことになった象徴とした。

まさに小さな街による小さな知恵の、しかし大きな価値のあるエコ活動である。



街のメイン通りを自動車通行禁止にし、その代わりに自転車道路をつくった。



ビオトープの沼を守ったのは一個のバケツだった。